

[B年] 聖霊降臨節第4主日(2022年6月26日)**【旧約日課】サムエル記上 16章14~23節**

14主の霊はサウルから離れ、主から来る悪霊が彼をさいなむようになった。15サウルの家臣はサウルに勧めた。「あなたをさいなむのは神からの悪霊でしょう。16王様、御前に仕えるこの僕どもにお命じになり、堅琴を上手に奏でる者を探させてください。神からの悪霊が王様を襲うとき、おそばで彼の奏でる堅琴が王様の御気分を良くするでしょう。」17サウルは家臣に命じた。「わたしのために堅琴の名手を見つけ出して、連れて来なさい。」18従者の一人が答えた。「わたしが会ったベツレヘムの人エッサイの息子は堅琴を巧みに奏でるうえに、勇敢な戦士で、戦術の心得もあり、しかも、言葉に分別があって外見も良く、まさに主が共におられる人です。」19サウルは、エッサイに使者を立てて言った。「あなたの息子で、羊の番をするダビデを、わたしのもとによこしなさい。」20エッサイは、パンを積んだらばとぶどう酒の入った革袋と子山羊一匹を用意し、息子ダビデに持たせてサウルに送った。21ダビデはサウルのもとに来て、彼に仕えた。王はダビデが大層気に入って、王の武器を持つ者に取り立てた。22サウルはエッサイに言い送った。「ダビデをわたしに任せさせるように。彼は、わたしの心に適った。」23神の霊がサウルを襲うたびに、ダビデが傍らで堅琴を奏でると、サウルは心が安まって気分が良くなり、悪霊は彼を離れた。

【使徒書日課】使徒言行録 16章16~24節

16わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。17彼女は、パウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」18彼女がこんなことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。」すると即座に、霊が彼女から出て行った。19ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。20そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。21ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」22群衆も一緒になって二

人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。23そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。24この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。

【福音書日課】マルコによる福音書 5章1~20節

1一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。3この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。4これまでも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。5彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。6イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわなくてくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」8イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。9そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。10そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。11ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。12汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。13イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。14豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。15彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。16成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。17そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってほしいと言いだした。18イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。19イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」20その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

サムエル記上 16章14~23節

14主の霊はサウルから離れて、主からの悪い霊が彼をさいなむようになった。15サウルの僕たちは彼に言った。「御覧ください。あなたをさいなむのは神からの悪い霊です。16王様〔直訳→我らの主〕、どうか御前に仕える僕どもに命じて、琴を弾くのが巧みな者を探させてください。神からの悪い霊があなたを襲うとき、その者が琴を奏すれば、あなたの気分をよくなるでしょう。」17サウルは家来たちに言った。「琴の名手を見つけ出し、ここに連れて来てくれ。」18従者の一人が答えた。「申し上げます。私はベツレヘム人エッサイの息子に会ったことがあります。彼は琴を弾くのが巧みで、力ある勇士でもあり、戦士でもあります。しかも、聡明で容姿に優れ、主が彼と共におられます。」19そこでサウルはエッサイのもとに使者を遣わして言った。「あなたの息子で、羊の番をするダビデを私のもとによこしなさい。」20エッサイはパンを積んだろばとぶどう酒の入った革袋、それに子山羊一匹を用意し、息子ダビデに持たせ、サウルに送った。21ダビデはサウルのもとに来て、彼に仕えた。サウルはダビデが非常に気に入り、自分の武器を持つ従者とした。22サウルはエッサイに人を遣わして言った。「ダビデを私に仕えさせてほしい。彼は私の目に適った。」23神の霊がサウルを襲う度に、ダビデは琴を手にして爪弾いた。するとサウルの霊は休まり、良くなって、悪い霊は彼を離れた。

使徒言行録 16章16~24節

16私たちは、祈りの場に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。17彼女は、パウロや私たちの後ろに付いて来てこう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」18彼女がこんなことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。」すると、霊は即座に彼女から出て行った。

19ところが、この女の主人たちは、金儲けの望みがなくなってしまうことを知り、パウロとシラスを捕らえ、広場の役人のところに引き立てて行った。20そして、二人を高官〔別訳→二人委員〕の前に引き出してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、私たちの町を混乱させております。21ローマ人である私たちが受け入れることも、行うことも許されない風習を宣伝しているのです。」22群衆

も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは、二人の衣服を剥ぎ取り、鞭で打つように命じた。23そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に入れ、看守に厳重に見張るように命じた。24この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。

マルコによる福音書 5章1~20節

1一行は、湖〔直訳→海〕の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場から出て来て、イエスに会った。3この人は墓場を住みかとしており、もはや誰も、鎖を用いてさえつなぎ止めておくことはできなかった。4度々足枷や鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり足枷を砕くので、誰も彼を押さえつけることができなかったのである。5彼は夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分の体を傷つけたりしていた。6イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7「いと高き神の子イエス、構わないでくれ〔直訳→私とあなたとの間に何の関りがあるのか〕。後生だから、苦しめないでほしい」と大声で叫んだ。8イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。9イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。我々は大量だから」と答えた。10そして、自分たちをこの地方から追いやらないようにと、しきりに願った。

11ところで、その辺りの山に豚の大群が飼ってあった。12汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。13イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れは、崖を下って湖になだれ込み、湖の中で溺れ死んだ。14豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。15そして、イエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。16成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人に起こったことや豚のことを人々に語って聞かせた。17そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと願い始めた。18イエスが舟に乗ろうとされると、悪霊に取りつかれていた人が、お供をしたいと願った。19しかし、イエスはそれを許さなくて、こう言われた。「自分の家族のもとに帰って、主があなたにしてくださったこと、また、あなたを憐れんでくださったことを、ことごとく知らせなさい。」20そこで、彼は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことを、ことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・6月26日「聖霊降臨節第4主日」の日課主題は「悪霊追放」。「悪霊」の問題は、ユダヤ・キリスト教の文脈のみならず、広く宗教全般が対峙してきた事柄で、人の人格や行動に負の影響をもたらす実体として想定されてきた。その実体は、しばしば「悪魔」や「サタン」など人格化された事物として認識されてきたが、概念としては、より抽象的かつ広義で、「人に対する負の影響力」全般が「悪霊」概念で扱われる。

・旧約日課は、「サムエル記上」から、サウル王が「神からの悪霊」にさいなまれるようになったことに対して家臣たちが招請した豎琴使いとしてのダビデが問題を改善したとする逸話箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、パウロらの宣教団がマケドニア伝道の端緒としたフィリピでの活動で直面した「古いの霊に取りつかれている女」の逸話の箇所。福音書日課は、「マルコ福音書」から、主イエスが「悪霊・汚れた霊」と対峙された代表的事例である「ゲラサ人の癒し」の箇所。

旧約日課(サムエル上 16 章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ正典「前の預言者」の第三に置かれた「王国草創の物語」として編纂された歴史物語文書。元来、一卷本として編纂されているが、便宜上、上下二巻に分けられている。上巻は、シロ神殿に属する祭司預言者サムエルによって王となるべき人物が神によって選ばれた者(油注がれた者)であることが示された後に、ベニヤミン族出身のサウルが王として統治した時代を扱う。下巻は、サウル王没後、ユダ族出身のダビデが、まずユダの王として、次いで「サウルの王国」であるイスラエルの王として統治した時代を扱う。ダビデは、上巻でサウル王の時代の初期から登場し、王の家臣として描かれている。

・「サムエル記」では、王国単位としての「イスラエル」と「ユダ」は最初から別個の独立した枠組みとして扱われ、サウル王もダビデ王も、その双方に対する軍事指導者・統治者であったことが、丁寧に示されている。北部の「イスラエル」と南部の「ユダ」は、古い時代から異なる歴史伝承を継承する文化圏として成立していた可能性が高いと考えられる。サウル王の出身部族であるベニヤミン族は、元来、北部に位置する「エフライム族」や「マナセ族」に近い部族として設定されているが、地勢的に北部と南部の緩衝地域に位置しており、ダビデ王以降の時代にはもっぱら「ユダ族」と行動を共にし南王国を構成するようになったと推認される。

・日課箇所は、サウル王の時代にダビデが登場し、王の家臣として仕えていく一連の逸話の一つ。前後には、ダビデが父エッサイの家で羊飼いとして過ごしていた時期に預言者サムエルによって油注がれ、将来王となるべき宣言を受けたという逸話(上 16:1~13)、サウル軍の軍隊がペリシテ人の軍隊と対峙していた中で、いまだ軍人として扱われていなかった少年ダビデ

が羊飼いの道具を用いて敵軍の勇士ゴリアテと一騎打ちして勝利した逸話(上 17 章)が置かれている。

・14 節「主から来る悪霊」の直訳は「主(ヤハウェ)からの悪い霊(ルアハ)」、15 節・16 節「神からの悪霊」の直訳は「悪い神(エロヒム)の霊(ルアハ)」、23 節「神の霊」の直訳は「神(エロヒム)の霊(ルアハ)」、同「悪霊」の直訳は「悪である霊(ルアハ)」。

これらの用語表現は、特に区別されずに言い換えられていると考えられる。「霊(ルアハ)」は、人の精神についても用いられる用語で、1:15「わたしは深い悩みを持った女です」＝「わたしは霊的に(ルアハ) 厳しい女」、30:12「元氣を取り戻した」＝「彼の霊(ルアハ)が戻って来た」、等の表現がある。

・旧約思想の原則として、「善悪二神論」的な世界観は排除されており、人にとって「悪」や「つまずき」とみなされるものもすべてひっくるめて「神からもたらされるもの」と考えられている。「民数記」22 章に登場する「妨げる者(サタナ)」としての「主の御使い」や、「ヨブ記」1~2 章に登場する御使いの一種としての「サタン」など。日課箇所の「主/神からの悪霊」も、「神からの霊」がサウルの心を悩ませるものとして働いたゆえに「悪い」と形容されているのであって、その本質として「善」に逆らう「悪」を有しているという理解ではないと考えられる。

使徒書日課(使徒 16 章より)

・「使徒言行録」については、前回までの解説を参照。

・日課箇所は、アンティオキア教会が派遣する宣教団の指導者バルナバとの意見の相違によって、パウロが独自の宣教団を組織し、新しい活動地として見いだしたマケドニア州に入り、その端緒としたフィリピにおける活動を伝える中に置かれた逸話の一つ。

・フィリピ(ピリッポイ)は、前 4 世紀、マケドニア王フィリッポス II 世によって創建され、自治都市として発展したが、共和政ローマ時代の末期、後に皇帝アウグストゥスとなるオクタヴィアヌスが勝利を収めた「フィリッポの戦」(前 42 年)で破壊された後、前 30 年以降、オクタヴィアヌス＝皇帝アウグストゥスが退役軍人を入植させてローマ風の都市として再建、14 世紀まで栄え続けた。ディアスポラ・ユダヤ人の居住については、史料から知られることが少なく不詳であるが、「使徒言行録」は、1 世紀中ごろにユダヤ会堂が存在しなかった可能性(少数のユダヤ人男性しか居住しておらず、会堂が未建設だったために、川岸に「祈りの場所」を設けて集会・安息日礼拝を行っていた＝使徒 16:13)を示唆している。

・パウロ宣教団のフィリピ伝道活動については、「使徒言行録」のほかに、「パウロ書簡集」に収められている「フィリピの信徒への手紙」等から知られる事柄がある。フィリピの教会共同体は、少数であったと考えられるが、初期のパウロ宣教団にとって重要な経済的支援者であったことを、パウロ自身が証言している。

・16 節「占いの霊(プネウマ・プトオン)」は、「ピュトンの霊」。「ピュトン Python」は、ギリシア神話で「ガイアの子」として登場する巨大な蛇で、古代ギリシアで世界の中心と考えられていた「神託所デルフォイ」の番人とされていたが、アポロンによって殺されて同所に埋葬され、同地は「アポロンの神託所」と呼ばれるようになったとされている。同地で巫女が恍惚状態で神託を行う際、地面の割れ目から噴出するガスを吸っており、そのガスが「ピュトンの吐き出す霊」と考えられていたという。日課箇所では描かれる「占いの霊に取りつかれた女奴隷」は、おそらく、この「アポロンの神託所」の巫女か、その巫女を模倣した神託を生業としていた者。

・「使徒言行録」によれば、パウロは、どの地でもユダヤ会堂とその周辺で宣教活動をしており、まったく異教の環境にある異邦人に直接宣教した事例は少ない(17 章のアテネ伝道が例外的事例)。すると、ここで描かれる事案は、パウロの意図とは異なるところで事後的に生じた出来事として語られていると見ることができる。フィリピン伝道への着手も含め、パウロの異邦人伝道が、彼自身の企図ではなく、神の計画により進められたものであることを示そうとしているのであろう。

福音書日課(マルコ 5 章より)

・日課箇所は、「ゲラサ人の癒し」として知られ、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えている逸話。「マルコ福音書」と「ルカ福音書」は、ほぼ同じ内容で逸話を描いているが、「マタイ福音書」は大幅に省略した簡略版を用いている。

・「ゲラサ人の地方」は、ガリラヤ湖南東部に位置する「デカポリス地方」を指している。元来は「デカポリス」の 10 の都市の中に「ゲラサ」があり、「マタイ福音書」が伝える「ガダラ」もその一つ。その地方名からも分かるように、ヘレニズム時代以降、ギリシア・ローマ系住民によって開発が進み、建設された植民都市が広がる地方である。ガリラヤ湖・ヨルダン川の西側および北部に居住域を展開していたユダヤ系住民から見ると、「ゲラサ人の地方」は、当時の典型的なギリシア・ローマ的異邦人の世界そのものを反映した地方とみなされていたと考えられる。

・日課箇所では、前半で「汚れた霊(プネウマ・アカタアルトス)」が、後半で「悪霊(ダイモニオン)」が使い分けられている。ただし、後半の「悪霊」は二か所とも、「悪霊に取りつかれた(ダイモニヅマイ)」という動詞形で言われている。「マタイ」はすべて「悪霊／悪霊に取りつかれた」の用語で描き、「ルカ」も「悪霊／悪霊に取りつかれた」に集約する傾向にあるが、「汚れた霊に取りつかれた」を一箇所残している。

・9 節「レギオン」は、ローマ軍団を構成する兵士の呼称「レギオナリウス」またはその軍団を指すとみられる。日課箇所では「汚れ」が扱われるのは、このローマ系住民に対する宣教・救済が問題となっているからだろう。

来週の誕生日 (6 月 26 日～7 月 2 日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-353 番「父・子・聖霊の」(= I-70 番「父、み子、み霊の」)は、9 世紀スミルナの司教メロファネスの作とされる讚美歌。曲は、ジュネーブ詩編歌から。
- ・21-507 番「主に従うことは」は、19-20 世紀米国メソジスト派牧師グラント・タラーの作詞作曲。孤児として育ち学校教育をほとんど受けないまま 19 歳で牧師になり、ソングリーダーとしても活動。日本語版は、1923 年版『日曜学校讚美歌』から継承。
- ・21-444 番「気づかせてください」は、『讚美歌 21』編纂に先立つ新作公募に応募・採用された日本人の作詞作曲の讚美歌。作詞の木原は国語科教諭を経て牧師になった。作曲の米野は鎌倉雪ノ下教会出身の音楽家でフィリピンの大学で教鞭をとっている。

21-353「父・子・聖霊の」= I-70「父、み子、み霊の」

Τριφεγγής Μονὰς Θεαρχική

English translation by Rev. John Mason Neale

O Unity of Threefold Light

1. O Unity of threefold light, / Send out Thy loveliest ray, / And scatter our transgressions' night, / And turn it into day; / Make us those temples pure and fair / Thy glory loveth well, / The spotless tabernacles, where / Thou may'st vouchsafe to dwell.
2. The glorious hosts of peerless might, / That ever see Thy face, / Thou mak'st the mirrors of Thy light, / The vessels of Thy grace. / Thou, when their wondrous strain they weave, / Hast pleasure in the lay: / Deign thus our praises to receive, / Albeit from lips of clay.
3. And yet Thyself they cannot know, / Nor pierce the veil of light / That hides Thee from the Thrones below, / As in profoundest night. / How then can mortal accents frame / Due tribute to their King? / Thou, only, while we praise Thy name, / Forgive us as we sing. Amen.

21-507「主に従うことは」

In his steps I follow

1. "In His steps" I follow as I go / On my pilgrim journey here below, / "In His steps" I follow day by day, / Trusting Him to lead the way.
[Chorus] Gladly in His steps I follow I follow I follow, / Gladly in His steps I follow, / Gladly in His steps I go.
2. "In His steps," what peace and joy I know, / Every day my path doth brighter grow, / "In His steps" His spirit dwells within, / Cleansing me from every sin. [Chorus]
3. "In His steps," I prove His matchless love, / While He leads me to my home above, / "In His steps" tho, pressed by every foe, / I shall conquer all, I know. [Chorus]
4. "In His steps!" how sweet to walk with Him, / Even tho, clouds my pathway often dim, / "In His steps" His smile illumines the way, / And my night is turned to day. [Chorus]